

松波総合病院 柔道部発足1年

医療と柔の道
両立を後押し

羽島郡笠松町田代の松波総合病院に柔道部が発足して、1年がたつ。当初は新型コロナウイルスの影響で自粛していた活動が昨年10月に再開され、今月には部員が公式戦に出場するなど活動が本格化している。日本のお家芸の柔道だが、全日本連盟への登録が団体、個人とも減少に歯止めがかからない状況の中、地域の中核病院が医療だけでなく、柔道界にも貢献しようとして動き始めている。

(玉田健太)

実業団登録 五輪選手輩出が夢

同連盟によると、個人の登録会員数は「2006年度以降、少子化の影響などから右肩下がりが続く。06年度は20万2253人だったが、18年度に初めて15万人を割り、19年度は14万3459人に。団体も18年度と19年度を比較すると243減となっており、今年度も個人、団体ともに大きく減少しているという。」

「礼節、精神、体力を向上させるスポーツで、生涯を通じて実践するのに適し

ている」と同部総監督の松波英寿理事長(64)。部を立ち上げたきっかけは、松波理事長が一時離れていた柔道を16年に再開し、6段昇段を目指したこと。自身が競技に打ち込むと同時に、仕事と競技を両立させて社会貢献できる団体をつくりたいと発足に動いた。

松波総合病院では、勤務時間を配慮するなど、部員が仕事と選手生活を両立できる環境を整える。松井陽子監督(35)によると、実業団登録している病院は全国的にも珍しいという。

松波理事長は「一部のプロを除いてスポーツに打ち込む多くの選手は、引退後の生活に保証がないのが現実」と思いを語る。部員の神鳥剛さん(23)は「(柔道以外)何も知らない30歳を今まで見てきた。社会人としてのスキルを身に付けながら、柔道に取り組むことができるのはありがたい」と感謝を口にする。

所属選手は4月に入部する選手を含めて2人とまだ少ないが、2、3年先までに数人が加わる予定で、男女とも団体戦に出場し、いずれ五輪選手を輩出するのが夢だ。松波理事長は「いつか五輪選手が誕生したら子どもたちの憧れの的になり、柔道をやろうという子どもが地域で増えると思う。青少年の育成に貢献できたら」と力を込める。



発足から1年を迎える松波総合病院の柔道部で、選手と汗を流す松波英寿総監督(中央)＝羽島郡笠松町常盤町、町民体育館